

サクラのバトン

「大河津分水の桜並木」。華やかに春の訪れを告げる桜は、燕の春の風物詩です。その起源は、人々を洪水から救う大河津分水路の建設を記念し植樹されたことから始まります。

今号では、「大河津分水の桜並木」がどのように生まれ、現在に至るまで受け継がれてきたのか、その歴史を紹介します。

◀昭和31年7月 大河津分水を視察する皇太子時代の明仁上皇陛下（右側中央）と出迎える山宮半四郎（左側右端）
〈山宮家所蔵アルバムより提供〉



◀雪が積もる田沢実入の墓（新潟市南区白根古川）。春を迎える4月には、大河津分水通水100年を前に実入の慰霊祭が行われる予定

父から子へ 通水のバトン

01
- Key person -

父と共に願った大河津分水路



田沢実入 (1852～1928)
庄屋の子として古川村（現・白根）に生まれた

1922（大正11）年8月に通水した大河津分水路。その建設に大きく貢献し、大河津分水に桜を植え始めた人物がいました。それが田沢実入です。田沢家の治水への想いは父・与一郎から始まりました。早くから大河津分水路の建設の必要性を訴えていた与一郎。その成果もあり、1870（明治3）年に第一次大河津分水工事が始まり、5年後に完成しました。しかし、5年後に父と想いを共にした実入は、大河津分水路の建設に向け、治水運動を展開する会社を創設するなど、工事の再開を訴えました。1883（明治16）年、実入は新潟県議会議員に初当選し、大河津分水実現のために東京へ請願を続けました。そんな中、病で倒れた与一郎から「大河津分水工事再興の志を受け継ぎ、達成に努力せよ」との遺言を託されます。実入は父の想いを受け、これまでに大河津分水路の建設を強く訴えました。

今も大河津分水を見守り続ける

私財を投じた活動を続けた実入は、1886（明治19）年に新潟県議会議員を辞職。その後は新潟県土木課の職員、さらには内務省へ入り、全国各地の土木行政を転々とし、地主から官職へ身分を変えながらも、大河津分水路建設にこだわり続けました。

1909（明治42）年、念願叶って第二次大河津分水工事が始まると、実入は内務省の技師として工事に従事。大河津分水が通水した翌年の1923（大正12）年に内務省を辞職しました。その時の年齢は71歳。生涯を大河津分水路建設に捧げた実入にとって通水の喜びは計り知れないものだったでしょう。

大河津分水の通水後、実入は桜の育成を目的に設立された「信濃川大河津分水保勝会」の初代会長となり、現在まで続く「大河津分水の桜並木」の礎を作りました。

実入の地元・古川村（現在の新潟市南区白根古川）に建てられた墓石は、大河津分水の方向を向いています。その生涯をかけ、大河津分水路の建設と現在の桜並木の礎を作った田沢実入は、その生涯を閉じた後もなお、大河津分水を見守り続けています。

桜を広め、日本有数の名所へ

山宮半四郎は、地蔵堂町（現在の燕市地蔵堂）の生まれで、田沢実入とともに桜を植え始めた一人とされています。

大河津分水の建設が始まると、この大仕事を後世に伝えるために一帯の公園化を企画、有志を募り私財を投じて桜の植樹を行いました。その後、1924（大正13）年には「信濃川大河津分水保勝会」を設立し、理事として初代会長の実入と共に活動を行いました。半四郎は大河津分水路建設に尽力した実入を「大恩人」と尊敬していたと伝えられています。実入の後、保勝会の会長となった半四郎は、さらに桜の植樹に力を入れ、約6千本の桜を植えたと言われています。また、戦争で一時中断を強いられた「おいらん道中」の復活にも尽力し、「大河津分水の桜並木」を一大名所となるまでに発展させました。

日本の桜から世界の桜へ

半四郎が1936年（昭和11）年に新潟新聞社地蔵堂支局記念号に寄せた「国華を愛せ」という寄稿文の中に次のような一節があります。

「桜日本を訪れる外客にせめて世界的大工事を背景とするこのオラガ分水の桜をも見せてやりたやの気分になるのである」

自身を大の花好きと称した半四郎は、「大河津分水の桜は日本全国に知られるようになった。今後はさらに、桜の国として日本を訪れる外国人にもぜひ、桜の名所として足を運んでもらいたい」と述べています。

世界的大工事を記念した大河津分水の桜が、多くの人々を惹きつける新たな名所になるようにと願った半四郎。その想いは時を超えて受け継がれ、現在も春の訪れとともに多くの人が桜を見るために大河津分水に集まります。

偉業を後世へ 植樹のバトン

02
- Key person -



山宮半四郎 (1882～1968)
旧地蔵堂町生まれ、町会議員・町長を務めた名誉市民



山宮家のアルバムの中に「大恩人」とつづられる田沢実入の写真と記事
〈山宮家所蔵アルバムより提供〉